

Fiji

[フィジー]

写真=今村 健志朗(写真家)

文・写真=高橋 香(青年海外協力隊)

常夏 の 笑顔 顔



子どもたちが元気いっぱい遊ぶ。
フィジーには底抜けに明るい人々が多い



大自然に恵まれるフィジー。海は子どもたちにとって最高の遊び場だ



首都スバ市内のマーケット。野菜や果物が豊富に並ぶ



イモはこの国の主食



昼食の準備をする女性

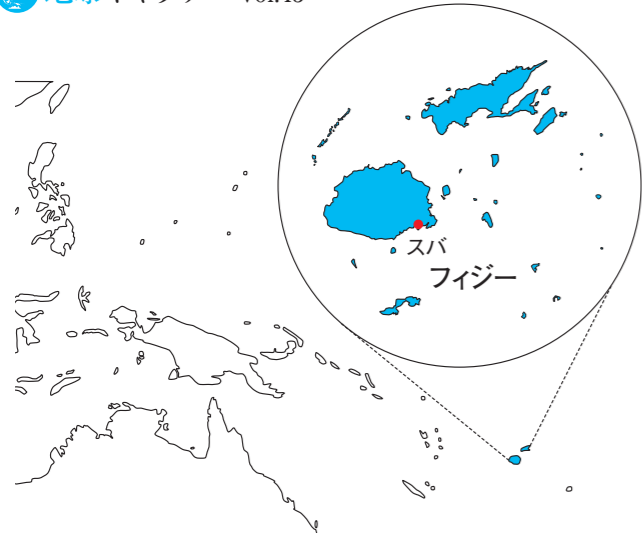


「写真撮ってよ!」と駆け寄ってきた少年たち

太平洋に浮かぶ常夏の島、フィジー。ここには、陽気な気候と同じくらい底抜けに明るい人々が暮らしている。楽しいことが大好き。冗談が大好き。食えることが大好き。大人も子どもも幸せそうな表情をしている。「バスがなかなか来なくても大丈夫。そのうち来るから気長に待てばいい」

「雨が降ってきたけど、傘がなくてって心配ないよ。きつとそのうちやむだろうから」

かな性格も、この気候が作り出している気がする。フィジアン(フィジー人)は家族や年長者をとっても大切にする。都市部では核家族化も進んでいるが、村では家族や村人の結び付きが強い。食料がたくさん手に入ったら、一緒に食べたっておすそ分けをしたりと、「共有」の精神が根付いている。子どもたちが家の仕事や弟妹を世話する姿もよく見かける。村の人々がまるで一つの家族であるかのように、助け合い、子どもをかわいがり、年長者を敬っている。



首都：スバ
 面積：1万8,270km² (四国とほぼ同じ大きさ)
 人口：約85万4,000人 (2010年)
 言語：英語のほか、フィジー語、ヒンディー語
 宗教：キリスト教(フィジー系)、ヒンズー教・イスラム教(インド系)
 1人当たり国民総所得(GNI)：3,610米ドル(2010年)
 経路：直行便はなく、ソウルや香港などでの乗り継ぎが一般的。
 通貨：フィジー・ドル(FJD) 1FJD=約46.3円(2012年3月現在)
 気候：南半球に位置するため季節は日本とは逆になる。11~2月ごろが最も暑く、6~9月ごろは朝晩に冷え込むことがある。



ラグビーはフィジアンに大人気のスポーツ



フィジー系、インド系、イスラム系など、みんな一緒に勉強



子どもたちは木登りが得意。はだして駆け上がっていった

フィジー料理 タロイモの茎の ココナツミルクあえ 「バセイセイ」



首都スバの市場には農作物のほか、魚やウニ、ナマコなど日本でもおなじみの海の幸が並ぶ。主食はタロイモやキャッサバで、お祝い事があるとこれらを蒸し焼きに。地面に掘った穴の中で熱した石の上に材料を置き、バナナの葉、毛布、土で覆い、あとは一時間半ほど待つだけ。ごごの上に女性も男性も座り、あぐらをかいて食べる。ティータイムの習慣もある。朝と午後、家

でも職場でも甘いミルクティーで人々は憩う。レモンの葉や香りのいい草もお茶にする。週末の社交場になくはならないのが、木の根を粉にして水で溶いた「ヤングナ」。1つのカップで朝まで回し飲みする。

料理にはココナツミルクとツナ缶が欠かせない。また、タロイモは根の部分だけではなく、葉も茎もココナツミルクと調理される。料理の下ごしらえに朝から時間をかけるフィジー料理。タロイモの茎をココナツミルクとあえる「バセイセイ」は村落でも都市でも身近な家庭料理だ。ゆでたタロイモの茎はしゃりとした歯ごたえ。手に入らなければフキや山菜で代用して試してほしい。



タロイモの茎を一本ずつフォークで裂く

【材料(4人前)】

タロイモの茎300g / ココナツミルク400ml / ツナ缶160g / トマト1個(みじん切り) / タマネギ1個(みじん切り) / トウガラシ1本(みじん切り) / レモン半個 / 塩・旨味調味料適量

【作り方】

1. タロイモの茎の皮をむく。
※手が痒くなるので注意
2. 沸騰したお湯で4分ゆで、冷水にとる。
3. 20センチ程度の長さに切り、フォークで縦に裂く。
4. 深めの皿に、温めたココナツミルクと3を入れ、塩と旨味調味料で味を調える。
5. 4にツナ、トマト、タマネギ、トウガラシを入れ、レモンを搾る。
6. タロイモやキャッサバと一緒に食卓に並べて、完成。

☆タロイモの茎とツナの代わりに、蒸した魚を使ってもよい。

編集協力：原田郁子(青年海外協力隊)



スバ中心部の繁華街。インド系の店舗も軒を連ねる

くるんとカールした長いまつげに、吸い込まれそうなくらい大きな瞳をした子どもたち。木登りをしたり、川で泳いだり、エネルギーで生命力にあふれている。自然の中には子どもたちの遊び場がいっぱい。まゆをピクッと上げるのは「Io(Ye)」の意味。話しかけて返事が返ってこなくても心配することはない。よく見るとまゆが上がっているはず。はにかみながらまゆを動かす様子が愛らしい。

フィジーには、フィジー系の人々だけでなく、インド系の人々もたくさん暮らしている。イギリスの植民地だった時代に、サトウキビプランテーションの労働者として、同じく植民地であったインドから多くの人が連れて来られたのが始まり。今ではインド系の人口は全体の約40%近くを占めている。

公用語は英語だが、街のあちこちからフィジー語やヒンディー語を耳にする。学校でもフィジー系、インド系、イスラム系といったさまざまな文化の子どもたちが一緒に勉強をしている。言葉、食べ物、服装など、多くの面でそれぞれの特徴が混ざり合い、現在のフィジー文化が出来上がっている。

この国には魅力あふれる自然がたくさんあるが、何よりも魅力的なのはフィジーで暮らしている人々だ。幸せな顔を見ていると、こちらも幸せな気持ちになる。

「今を楽しんで生きる」
これがフィジアンライフだ。



くるんとカールした長いまつげがかわいらしい

衛星通信を活用し

大洋州全域に教育やビジネスのネットワークを構築

大洋州地域では、その地理的な条件から域内で協力して遠隔での高等教育を推進している。今後は教育に加え、ICT（情報通信技術）サービスでも地域の拠点となることを目指すべく、JICAは支援を続けていく。



[上] オンライン学習管理システムを使って勉強するトンガ分校の学生たち

[下] USPネットを通して情報を送信するパラボナアンテナ。左が当初から使われているもので、右がほぼ同じ機能でコストが安い最新型



大洋州地域におけるICTサービスの拠点となることを目指す「Japan-Pacific ICTセンター」。多目的講堂やコンピューター室、IT起業スペースなどが入っている

1969年、大洋州地域の12カ国により設立された「南太平洋大学（USP）」。

フィジーの首都スバに本校を、他の11カ国・地域の主要都市に分校を置くUSPは、域内で最高水準の高等教育機関だ。一国の人口が少なく、島が点在する大洋州では、各島で初等・中等教育は受けられても高等教育までは難しい。この地域共通の課題を解決するために、各国が協力して高等教育を提供することにしたのだ。

しかし設立当初は、教材を郵便で各分校に届けるというアナログな方法。実際に教員による講義を受けられる本校と比べると、分校は一方通行の指導になってしまっていた。そこで98年、日本の無償資金協力により、衛星通信を使った「遠隔教育ネットワーク（USPネット）」を構築。分校で、本校での講義の映像を受信し、パソコンやテレビを介して講義を受

けられるようになり、また音声でのやりとりもできるため、疑問があればその場で質問できるようにもなった。その後JICAは、2002～05年に「南太平洋大学遠隔教育・情報通信技術強化プロジェクト」を実施し、講義内容の質を向上させるため、コンピューター科学の教員を育成するなど、さらなる支援を行った。

そして2010年からは、「南太平洋大学ICTキャパシティビルディングプロジェクト」を実施中だ。USPの学生が増えたことで全体の約半分が分校に通うようになったものの、USPネットのデータ送受信システムが旧式で通信量の増加に対応しきれず、分校に全科目の講義を配信できていないという校舎間での教育格差が生まれつつある。そこで、本校でも分校でも生徒全員が一定の質の教育を受けられるようにするため、トンガやバヌアツ、ソロモン諸島などの島々では、最新の送受信機器の

導入を進めている。また分校にいても、USPネットやインターネットを通じていつでも教員に質問できたり、学生同士でリアルタイムにディスカッションを行える「オンライン学習管理システム」の利便性を高めることで遠隔教育の学習環境のさらなる向上に取り組んでいる。

一方、2012年2月には日本の無償資金協力により、USP本校の敷地内に「Japan-Pacific ICTセンター」が設立された。遠隔教育の拠点となったUSPに併設することでその技術やノウハウを活用し、このセンターを「ICTサービスのハブ」として大洋州地域の情報通信技術産業を発展させていくことが目的だ。完成記念式典に出席したフィジーのジョサイア・ヴォレンゲ・バイニマラマ首相は、「地理的条件から大洋州地域の経済成長にはICTの発展が欠かせない。遠隔教育の実績をビジネスにも役立てたい」と話している。

青年海外協力隊の発案で古川宇宙飛行士と交信!

USPを舞台に、2011年10月14日、「大洋州初」ともいべきイベントが開催された。青年海外協力隊（理数科教師）の池田知世隊員が中心となり、当時、国際宇宙ステーションに長期滞在していた古川聡宇宙飛行士と、池田隊員が活動するフィジーのスパサンガム高校の生徒、さらにUSPの学生が衛星通信を使って交流したのだ。

実は6月のフィジー赴任直後から準備に取り掛かっていた池田隊員。フィジーでは、中学や高校で宇宙について学ぶ機会

がほとんどないため、池田隊員が宇宙の成り立ちや天体、また国際宇宙ステーションに関する授業を行い、それを受けて生徒たちは古川宇宙飛行士への質問を考えた。当日は、スパサンガムの生徒、USPの学生、関係者を合わせ90人ほどが参加。生徒たちからは「宇宙ステーションと地球ではどちらが過ごしやすいですか?」「ホームシックにかかりましたか?」「どうやってごみを処理しているのですか?」といった質問が投げかけられ、古川宇宙飛行士からの「宇宙のほうが断然快適ですよ」という意外な答えに驚いていたという。「宇宙とつながるという貴重な体験に生徒たちは目を輝かせていました」と池田隊員は話す。



USPのビデオ会議室と国際宇宙ステーションを結び、古川宇宙飛行士と交流

教え子とともにイベントを成功させた池田隊員（右端）。「生徒がこれを機に理数科への関心を高めてくれたら」と期待する

